

小児看護における認定看護師の役割と活動の実際

◆ 特集にあたって ◆

少子化のなか、子どもと家族のニーズに応えるために

小児領域こそ、専門性の高い看護師が必要である。

少子化のますますの進展により、社会全体で子どもを育てる経験値が低下し、親の育児する力は環境や経済状態などの影響を受け、差が広がっているように感じる。家族形態の多様化、家族機能の課題なども相まって、児童虐待予防を含めた育児支援の必要性はますます高まっている。

入院を必要とする子どもの数は減じ、総合病院の小児病棟は縮小、混合病棟化、閉鎖を余儀なくされている。小児の入院を受け入れている病院のうち、成人との混合病棟は76.8%であり、混合病棟が一般化しているといえる¹⁾。混合病棟においては病棟設備などの課題のみならず、小児看護の経験者が少ない、専門的知識不足などの問題を抱えている。

また、小児病棟や小児専門病院においても、入院期間が短縮し、専門的な治療を短期間で行う必要があり、複雑な状態の重症な子どもたちを対象に緊張感のある高度で専門的な看護が求められている。

周産期医療、新生児医療の進歩により、医療的なケアを必要とする子どもの数は漸増しており、在宅には全国に約20,000人がいると推計されている。NICUからの早期からの退院支援により、在宅へ移行し地域生活期を家族と過ごせるようになってきている。子どもの成長・発達に沿って変化する健康課題や社会生活上のニーズなどに対応するには、医療的ケアをより生活のなかで無理なく継続できるような支援、成長・発達の可能性を最大限に発揮できるような支援が求められている。

看護師の基礎教育にも少子化の影響は大きい。子どもとかかわる経験が少ない看護学生は小児看護実習におい

て、子どもとのかかわりに大きな不安や困難を抱える。さらに、小児看護実習の場の減少により、小児看護実習の時間を十分に確保できない状況もあり、ごく短期間しか子どもの看護を経験できずに看護師になることも多い。

今後、あらゆる場で、ごくたまにしか出会わない子どもを、経験が少ないなかで看護しなければならない状況が増えると想定される。そういった状況下では、小児をよく知る専門性の高い看護師を活用できる体制整備や、そういった看護師たちを指導し支援する機会がますます必要となるのではないかと。

専門性の高い看護師としてはすでに、専門看護師、認定看護師など多数が小児看護に携わっている。なかでも認定看護師は、2019年に制度を改正し、「あらゆる場で看護を必要とする対象に、高い臨床推論力と病態判断力に基づく水準の高い看護を実践できる認定看護師」を目指す看護師像とした。臨床推論力・病態判断力を強化するために、教育に「特定行為に係る看護師の研修」を組み込み、分野を再編した。ここでいう「あらゆる場で看護を必要とする対象」には、もちろん子どもが含まれている。「小児プライマリケア認定看護師」の教育も開始されている。

【文 献】

- 1) 日本看護協会・編：2020年病院看護実態調査報告書。
<https://www.nurse.or.jp/home/publication/pdf/research/96.pdf>

東邦大学看護学部教授
荒木暁子 Araki Akiko